CONTENTS

第一章
堅物夫は毒に倒れる
005

第二章
堅物夫の毒が抜けたら
035

第三章
特別任務のはじまり
059

第四章
特別任務のつづき
089

第五章
特別任務が終わったので
121

終章
家族のこれから
155

番外編episode1
堅物騎士の妻は女神である
171

番外編episode2
やはり、堅物夫は完璧なので
207

第一章

堅物夫は毒に倒れる

私と夫は契約結婚である。

夫との出会いは学生時代だ。総合成績でクラスが編成される実力重視型の国立学校に通っていた我々は、十五歳の時に出会いずっと同じクラスで十八歳まで過ごした。しかしそこで何かあった訳でもなく、ただただクラスメイトというだけの関係だ。知り合いよりは知っている、くらいが精々の間柄だった。

そんな我々が何故結婚に至ったかといえば、それは二十二歳の時の同窓会でお互いに親族から結婚を迫られて困っているという共通の悩みがあったからだ。私も夫も貴族籍を持たないが貴族の親族がおり、いわゆる分家の出身だった。

平民は、特に男性など二十代後半から三十代前半まで結婚しない人も増えてきているというのに、貴族の常識ではそれは通用しない。貴族の結婚は女性は十代後半から二十代前半、男性でもそれに少し足したくらいが平均だ。たとえ結婚が遅れていたとしても婚約者くらいは捕まえておけ、いないならこちらで探す、と宗家から純粋に心配されれば気も滅入るというもの。それが善意であってもそう感じてしまうのは、きっと私の心が未熟だからだろう。年相応に振る舞いや装いに気をつけ、人からは上品に見えると言ってもらえたこともあるが、私はその程度の人間なのだ。

しかし二十二歳当時、私は王宮お抱えの治癒魔法士としての仕事をやっと一通り覚え、新薬の開発や新しい治癒魔法の開発などに携わって忙しくしていたので、婚活もお見合いもできれば御免被りたかったのだ。久しぶりに会う同級生たちの顔に気が緩み、そうぽつりと愚痴を言ってしまったのを夫が聞いて、では、という流れになり結婚をした。

……自分でも、あの時はどうかしていたと思っている。何が、では、だったのか、私は今でも夫を問い詰めたい。けれど、離婚されては困るのでそんなことはできなかった。親戚付き合いや外面など、そういう打算的なこともあるがそれが一番の理由ではない。

私は夫が、スチュアート・ドロワが学生時代から好きだった。いや好きというか、憧れが強かったのかもしれない。現在、王宮所属騎士として王都警備隊に属し若くして副隊長に任命されている彼は、優秀で芯が強くそして優しい人だった。元々長身で恵まれた体格だったが、騎士になるべく鍛え上げた体は大きく逞しい。よくよく見れば整った顔をしているのに、切れ長の目のせいか黙っていると厳めしい風体であるから第一印象では少し誤解を受けやすい人でもある。そんな外見の印象から、昔から堅物だの融通が利かないだのと言われていたのも知っているが、それは結局校則やルールを無視している側からの意見である。彼らにも都合や主張があるのだろうが、逆恨みであることも多かった。

夫は学生の頃から大声で笑ったりふざけて悪戯をしたりするような人ではなく、とても大人びていた。そしてルールに厳しかった。制服の着方、提出物などは勿論、遅刻なんて論外だ。ある時には教師以上に厳しい彼だったが、それでもクラス内で浮くことはなく、むしろ慕われていたくらいだった。彼の周りにはいつだって人がいた。

「おい、スチュアート。こいつの制服は注意しないのか？」

「何でだよ。襟ブローチ着けただけだろ。……大丈夫だよな？」
「問題ない。制服は第一ボタンから留め正しい位置でズボンを穿いていればいい。極端な改造や華美な装飾は校則違反だが、この程度の襟ブローチならその範疇ではない」
「よかった、そうだよな。ていうか、むしろお前のほうが注意対象だろ。この前の論文提出、ギリギリまでかかって結局参考文献の丸写し箇所がかなり多かったじゃないか」
「提出したからいいんだよ。なあ、スチュアート」
「ああ、提出できたならいい」
「ほら！」
「もっとも、提出はあくまで最低条件であり評価とは別物だと思うが」
「う……。それを言うなよ……」
「ははっ、まあ、次頑張れよ」
スチュアートはそこにいるだけで目を惹く存在だったので、在学中は教室や廊下でこんなふうにじゃれ合っているのをよく見かけた。
あんなにも人に囲まれていたのはスチュアートが闇雲にルールに固執していた訳でなく、そのルールを守る意義を誰よりも丁寧に伝えていったからだろう。それに不必要なルールの撤廃にも積極的だった。
私たちの入学当初、何故か女子生徒は当番制で毎朝教室の掃除をせねばならず、男子生徒は体力作りの為だと毎朝グラウンドを十周走らされていた。入学してすぐにそれを疑問に思った彼は、学園長

に直談判し多くの生徒の署名を集め僅か半年でそのルールを撤廃させたのだ。結果掃除は放課後に全校生徒が当番制ですることになり、グラウンドマラソンも男女共にしたい人だけがするようになった。ちなみに、彼は卒業まで毎朝走っていた。
「いやでも、あれは本当に助かった。僕は体力がないからマラソン後すぐの授業が辛くて……」
「それな。あ、じゃあさ、スチュアート。今度は掃除と宿題の廃止とかどうだ？」
「……マラソンは強制であった上に、体力作りという目的はあったものの、評価対象ではなかった。また女子の参加も禁止されており、平等とはいえなかったから皆が廃止に賛同してくれたんだ。掃除は教室を清潔に保つという分かりやすい意図があり、学校を使う生徒全員に利点がある。自分たちが掃除しなければならないなら、初めから汚さないように気をつけるからな。それから宿題だが、あれは予習復習を兼ねている上に評価対象だ。お前が廃止させる為に行動するというのなら止めはしないが、評価基準にしているものが一つ減れば小テストなどが増えるかもしれないぞ」
「……やめておきます」
そうスチュアートが友人たちと話している声を聞いて、確かにそうだと納得をしたものだ。彼の考えは学生にしては大人びていて、別の視点から物事を見ているかのようで新鮮だった。
そんなふうに意図せずではあったらしいが目立っていたスチュアートを、私はただ「すごいなあ」と眺めていた。雑談をした記憶も薄い。用事があれば話すが、それ以外は特にかかわったこともない。
ただあの日、雨が降っていたあの日の図書室で自分では取れないところにあった本を取ってもらったその時に、私は彼への好意を自覚した。

「欲しい本はこれか？　それとも別の本か？」
「……これです、ありがとう」
「いや、このくらいなんでもない」
たったそれだけのやり取りだ。なんともあっさりとして特別な会話でもなかったのにと、自分自身でも驚いた。……その程度のぼんやりとした憧れだったのだ。別にスチュアートとどうこうなりたいなんて思ったこともなかった。
そんな我々がどういう訳か結婚して、もう三年である。二十二歳の時に婚約をして二十三歳で結婚し、現在は二十六歳だ。私たちの間には愛はなく、お互いに親族が煩いからという理由で取り決めた結婚という名の契約だけがある。身勝手な虚しさなど感じるだけ無駄なので見て見ぬふりをしているが、それができるのも夫があまりにも結婚に向いていたからだろう。
「ミア、他人同士が同じ家に住むのだからお互いに譲れないことを話し合おう。その妥協点を探す必要もある」
なんて、初めて言われた時にはひどく驚いた。私はてっきり夫がルールを決めるのだとばかり思っていたので、意外でもあった。それをそのまま正直に言うと、彼は分かりやすく眉間に皺を寄せた。
「我々は夫婦になるのであって、雇用主と使用人の間柄になるのではない。と、思っているのだが……」
気まずそうに言葉を濁したその時のスチュアートは、とても困っているように見えた。私は勝手に眺めていただけだったから、彼のことなど何も分かっていなかったのだ。彼は結婚という共同生活に

とても協力的だった。
それから私たちは何度も話し合った。お互いの実家で親から教わったルール、社会に出てから当たり前だと思っていたマナー、食べ物の好みや寝る時間、衛生観念などのすり合わせは結婚前に大体済ませた。生活していく上で戸惑いはあったが、それもその都度話し合った。
家事等は私の実家で働いていた老夫婦が新しい家に住み込んでくれることになり、彼らの手伝いを通いで数人雇うことになった。そこまで大きな家でなければ二人だけで生活することも考えていたのだ。しかし夫が騎士として働いている都合上それなりのセキュリティが必要になり、お互いの宗家がお祝いを弾んでくれたこともあって、郊外ではあるがお屋敷一歩手前くらいの家に住むこととなったので使用人は必要だった。
結婚相手が学生時代の憧れの人で、若い騎士としてはかなりの出世頭。生活上の不満は話し合いで解決する努力をしてくれるのだ。お金の心配も家事等の不便もない。私の結婚はかなりの成功例だといえるだろう。
さらに、スチュアートは私の性的欲求まで満たしてくれた。
「ミアが嫌でないのなら、俺は子どもが欲しいと思っている」
そう言われた時は、本当に絶句した。スチュアート・ドロワという人と性があまりにも結び付かなかったのだ。いつでも背が伸びていて清廉潔白な彼に、そういうものがあったのかと一瞬放心してしまった。
「ミア？」

「え、ああ、ええ、ごめんなさい。何でもないんです。ええ、ええと……」
「落ち着いてくれ。返事は急かさない」
「い、いいえ。問題ありません。子どもを持つのは、私も賛成です」
「であれば、性交が必要になるがいいのか」
「……あけすけすぎませんか」
「……重要なことだ」
私は頬が熱くなるのを感じつつ、けれどそれを無視して平然を装い小さく頷いた。結婚をするというのに、この程度で恥ずかしがっているなんて、そのほうがずっと恥ずかしいような気がした。
「ええ、必要なことですから」
だから我々は一か月に一度、同じベッドで寝る。スチュアートの手はどこまでも優しくて、一緒に眠る日はいつも泣いてしまいそうになるくらい幸せなのだ。満たされるとはきっとこういうことをいう。周りを納得させる為の結婚だったが、私は彼の妻になってからずっと幸福を感じている。
ただ、私たちにはまだ子どもがいない。婚前に検査を受けて問題がなかったので、頻度かタイミングが原因なのだろう。
けれど、もう三年だ。我々が絶対に跡目の必要な貴族であるなら、立派な離婚理由になる。実際の我々は貴族ではないけれど、スチュアートは子どもが欲しいらしかった。幸い、私は結婚後も王宮で働いているので離婚したとしてやっていける。親族に口を出されたとしても、結婚に向いていなかった、子どもが産めなかった、などいくらでも言い訳できるだろう。彼から言いづらいのなら私が切り

出すべきなのだ。この三年でそれだけの幸せを貰った。その恩を仇で返すことはしてはならない。
……それなのにこの幸福を手放すのが惜しいなんて、私は業突く張りである。
離婚はしなければならない。それが夫の為なのだ。しかしどうやって言い出そう。最近はずっとそれを考えているが、いい考えが浮かばなかった。けれど、変わりのない平穏な日々でもあった。それなのにその平穏は、簡単に崩れるものであるらしい。
「ミア・ドロワ魔法士！　いらっしゃいますか、ドロワ副隊長が！」
そう慌ただしく王宮の治療所に入ってきたのは一人の若い騎士だった。空は、赤く染まろうとしていた。

スチュアートが、任務中によからぬ毒を受けたらしい。
王都警備隊が前々から目を付けていた犯罪組織が、想定外の動きをし始めたことが発端だそうだ。組織の人間が通常動かない筈の昼間に活発に動き出し、複数の人間を郊外の廃屋に連れ込みだしたと見張りから連絡があったらしい。これまでも夜間にそういった動きはあったがその廃屋に出入りしていた人は皆、自分の意志で歩いていたのだ。しかしその日は複数人を無理矢理連れ込んでいたようで、しかも組織の人間も多く集まっていたことから危険度が高いと判断され、警備隊はその組織の緊急捕縛に乗り出した。その際、組織の一人が何かしらの液体が入った瓶を投げつけた。そしてその得体の

知れない液体が、スチュアートにかかったそうだ。若い騎士が言うには部下を庇ったらしい。
厄介なことにその毒は魔法薬だった。けれど、毒自体に皮膚を爛れさせたり内臓を壊死させるような力はない。騎士の中には魔法を使える者もいたが、それ以上は解析できなかったらしい。緊急事態であったこともありスチュアートはそのまま犯罪組織を捕らえる判断をしたが、帰ってきてからの言動がおかしいそうだ。
私は上司と数人の同僚たちと共にスチュアートのもとへ向かった。
「……ええ、何これ」
顔をしかめてそう言ったのは治療所の所長だ。私の上司である四十代後半の彼は領地を持たない男爵であり、普段はおっとりとした穏やかな人である。
しかしそんな穏やかな人が顔をしかめて嫌そうにそう呟いてしまう程、警備隊の詰め所は混沌としていた。そこは騎士で溢れかえっており、あらゆるところで言葉が飛び交っていたがどうやら中央で何かが行われているようだった。平坦な夫の声とそれに反論する泣きそうな男性の声がそこから聞こえてくる。
「う、うう……。そこまで言わなくてもいいじゃん……」
「そこまで、とは？」
「おじさんもね！　頑張ってるんだよ？　ただちょっとおじさんくらいの年になるとさあ、体がしんどい時とかもあるの！　加齢なの！　ちょっと報告書の仕上がりが遅れるのだってたまたまじゃない！」

「いえ、隊長の提出物が遅いのは常のことですので、たまたまではありません。また、ちょっとでもありません。さらに、隊長はそのお年で素手で野生のクマと渡り合えるのですから体力や体調面での不具合でもありません」
「うぐうう……っ」
「以前から溜めているこの書類を片付けていただけないのでしたら、その紐は外せませんので」
「これは一日の量じゃねえって……」
「ええ、何日かかっても結構です。終わるまで処理し続けていただければ」
混沌とした詰め所の中央で言い争っているのは、スチュアートと王都警備隊の隊長だ。何故か隊長が椅子に括りつけられているが、その前には山積みの書類が並べられている。
「そうだ、スチュアート！　もっと言え！」
「我々も全面的に同意しますからね！」
「おいこら、この裏切り者ども！」
囃し立てているのは、胸にスチュアートと同じバッジをつけている二人だ。つまり、彼らも副隊長なのだ。王都警備隊には副隊長が三人おり、それぞれ隊長を支え下の騎士たちを統率している。……と、聞いていたが、これは本当にどういう状況なのだろう。
「怒鳴る元気がおありなら、それを書類処理に注いでいただけますか」
「やるよ、やるけどさあ……。なあ、治癒魔法士たちまだ来ないのぉ？」
「いや、来てるんだよなあ……」

所長が思わずといったふうにぼそりとそう呟くと、今まで我々に気付いていなかった騎士たちが一斉にこちらを向いた。体格のよい人々が揃って動くと威圧感がある。
「あー！　待ってたあー！　うちのスチュアート、どうしたのこれ!?　いつもより倍以上厳しいんですけど!?」
「お前のそれは身から出た錆だろう。が、まあ、この匂いはあれだな。自白剤の出来損ない」
所長がこちらを向くので、私以下部下たちは黙って頷いた。
スチュアートの周りには粗末な魔法の匂いがこびりついていて、魔法薬をかけられたことは明白だった。この匂いは確かに自白剤に使うものと似ている。似ているだけで同じものではないが、だからこそややこしそうだ。頭の中でいくつか解除用の魔法式が浮かんでは、問題がありそうだと消えていく。正規の方法で作られていないものは効果が低いことが多く、そうであるのに術式がぐちゃぐちゃであるから解除がひどく難しいのだ。
「……自白剤の出来損ない？」
「最近こういうのの粗悪品が街に出回っているらしいってのは聞いていたが、その原液でもかけられたんだろう。自白剤に使う魔法植物の匂いがする」
「体は洗わせたし服も着替えさせたぞ。それに、自白剤でこんなふうになるのか」
「我々の言う匂いっていうのは魔力の残り香のことだから素人には分からんよ。自白剤として作られた魔法薬は、自制心を薄める効果がある。通常では言えないことを言わせることが目的なんだ、自制なんてしてもらっては困るだろう。似て非なるものではあるが、ものすごく噛み砕いて説明するなら、

酩酊状態というのが一番近いかな。その粗悪品であるから、目の前の事象や欲求に対して我慢できなくなるみたいな作用があるんじゃないのか」
「そんなふうに？」
「こんなふうに」
所長と隊長が話し合っている横を通り、何故かスチュアートがこちらに向かってくる。
そして何故か、私はスチュアートに両頬をがしりと掴まれた。悲鳴を上げなかっただけ、私は理性的であるのだろう。
「あ、あの、スチュアート……？」
「……ミア、ミアだ。何故ここに？　仕事中では？　ああ、俺も仕事中だ。隊長に書類処理をさせねばならない。だが、ミアが」
明らかに焦点が合っていない目で見下ろされ、まずいと思った時にはもう所長が指をパチンと鳴らしていた。その一瞬で魔法が展開され、スチュアートの目が強制的に閉じられる。これは痛みなどで興奮した患者を一時的に鎮静化させるものだ。しかし気絶させるものではないので、彼は瞼を閉じて立ったままである。
所長はふうと息を吐くとまた隊長に向き直った。
「警備隊長殿、ドロワ副隊長には休養が必要かと。下手に薬を飲ませるより毒が抜けきるのを待ったほうがいい。まあ、今日含め三日程でしょうな」
「よし、スチュアート。お前有給も溜まってるから一週間休め！　隊長命令な！」

「ミアさんも一緒に一週間の休暇ね。君も有給溜まってるから。経過観察しなくちゃだから実質休みじゃないかもだけど、もし手伝いが必要なら呼んで。すぐ誰か行かせるから」

はあ、と返す間もなく私とスチュアートは馬車に乗せられ家に帰された。いつもは二人で時間を合わせて乗合馬車で帰るのだが、今回は緊急事態ということで馬車の費用は警備隊が持ってくれるそうだ。乗合馬車の駅から家までは少し歩くので、家の前まで馬車を着けてもらえるのはありがたかった。

スチュアートはまだ所長の魔法が効いているらしく、家に帰ってもされるがままだ。あの鎮静魔法にここまで効力はない筈なのに、目も開いているが私が手を引くままに歩き食事を勧めればそれを食べ、安静にしているようにと伝えると窓際の椅子に座ってぼんやりと外を眺めている。日は既に落ちていて、夜空がやけに綺麗だった。

いつもはもっときびきびと動く夫が大人しく、また一言も発しないのはあまりにも不自然で不思議な光景だった。使用人の老夫婦も困惑した表情をしている。

「……奥様、旦那様は大丈夫なのですか？」

おずおずとそう聞いてくる老婦ユリアにこれ以上不安を与えないよう、私は笑顔を心掛けた。

「ええ、ユリア、問題ありません。一週間は様子を見ますが、明後日には毒も抜けきる筈です。そこまで効力の強い毒でもなさそうなので、おそらく明日にはもう大分落ち着くと思いますよ」

「さようですか、よろしゅうございました。では、本日はもうお休みに？」

「そうですね、お風呂に入って休もうと思います。二人ももう休んでくれていいですよ」

「かしこまりました。しかし、何かあればお呼びくださいね」

「ええ、ありがとう」

説明を受け、表情がいくらか緩んだ二人が下がったあと、私は静かにスチュアートに近付いた。

「スチュアート、気分はどうですか？」

スチュアートは声に反応してゆっくりと私のほうを向いた。今まで何も話さなかったので返事がないかもとは思ったが、それを確認することも重要だ。鎮静魔法が効きすぎているなら、それはそれで治療の対象になる。

しかし夫は私の顔をじっくり眺めたあと、口を開いた。

「……悪くない。が、頭がぼんやりとしている」

「そう、ですか。今日のことは覚えていますか、毒をかけられたことなど」

「今日……。今日、は、朝起きて、ミアに挨拶をして一緒に朝食を食べた」

「そうですね」

これは、もしかすると意識か記憶の混濁があるのかもしれない。鎮静魔法が効きすぎているのかそれとも毒のせいか、はたまた両方か。私はスチュアートの手を取って脈を取りながら話の続きを待った。

「朝食に、ミアの好きなオレンジが出て、嬉しそうだった。ミアが嬉しそうで、俺も嬉しかった」

「……そうですか」

「それから身支度を済ませて、乗合馬車に乗って出勤した。乗客が多くて、ミアが潰れないか心配したが、その分くっついていられたのはよかった」

「……」
「王宮に着いて、本当はミアを治療所まで送りたかったが、それは我慢した。でしゃばりすぎてミアに疎ましく思われるのは嫌だった」
黙って聞きながら私は、多少の違和感を覚えていた。いや、多少どころではないのかもしれない。スチュアートは、何の話をしているのだろう。ああ、脈は正常だ。熱もない。
「それで、今日は本来内勤だけの筈で、だが奴らに動きがあったから……」
「そ、そうです。その時に、毒をかけられたんですよ。覚えていますか？」
「ああ、新人がへまをした。けれど、新人とはそういうものだ。あれは守り育てなければならない。俺もそうしてもらったから」
その真っ直ぐで正しい言葉が、どうしてか耳に痛かった。つまり、新人を守る為にスチュアートが盾となることは今後もあるということなのだ。それは騎士として、先達としてあるべき尊敬される姿である。盾にならずとも危険な職務だ。それを知っていて私はこの人と結婚をしたのに、今更になって強く実感してしまった。
「……立派なことです。ですが、だからこそスチュアートは今、通常の状態ではありません。一週間は安静にしましょう」
「ああ、隊長から命令された。覚えている。ミアも一緒だ。指示されていた」
「そうですよ」
受け答えがここまでできているなら、今夜はもう休ませていいかもしれない。けれど……。

「スチュアート、心配なので今夜は一緒に休んでもいいですか？」
「……一緒に？」
「ええ」
夜中に何かが起きても困る。しかし言ってしまったあとで、スチュアートが自白剤の紛い物をかけられたのだと思い出した。そしてそれは完璧な自白剤ではない為か、自制心を弱くする作用が主であると予測される。つまり今の彼は、自分自身の欲求に正直になっている状態だ。質問には答えてくれたとしても、一緒に寝るのは嫌だと断られるかもしれない。
「あの、スチュアート、嫌なら……」
「いいのか」
「え？」
「そうか、いいのか、そうか」
スチュアートはうわ言のようにそう言いながら立ち上がり、私の手を取った。思ってもみない行動に目を瞬かせていると、彼はそのまま私の手を引いて歩き出す。おそらく、やっと鎮静魔法の効果が切れたのだろう。何かおかしな行動をするようなら止めなければならないが、このまま寝るのであれば問題はない。
着いた先は、予想通りにスチュアートの部屋だった。しかし彼は着替えもせずにベッドに向かっていく。……まあ、今日くらいはお風呂を省略してもいいだろう。何せ、彼は正常な状態ではないのだから。

「ミア」
「は、ぃ？　ぇ、んん……!?」
ベッドの前まで来たところで名前を呼ばれたかと思ったら、すぐそこに夫の顔があった。避ける間もなく唇が触れる。無遠慮に押しつけられた唇は少し痛くて、けれどそれに驚いている暇もなく強引に舌が入ってきた。
そのまま何故か体を押さえ込まれて身動きができないでいると抱き上げられ、ベッドに下ろされる。
「は、スチュ、アート……？」
「ああ、ミア。君から誘ってくれるなんて、初めてのことだ。嬉しい」
「え、えっと、あの、ん……っ」
ぐ、と肩を押され、ベッドに倒される。何が起こっているのか理解する前に首筋に顔を埋められて、びくりとした。
「ま、な、なんですか、スチュアートっ」
「？　一緒に寝るんだろう？」
「え……。えっと、そうですよ。でも寝るって、ただ寝るということであの、睡眠を……」
スチュアートはきょとんとして、ゆっくりと首を傾げた。どこか無邪気で無垢さを感じるその表情がこの状況とあまりにも不釣り合いだ。
「つまり、俺が勘違いをしたということか。してはいけないのか」
「い、いけない、というか……」

「いいのか？」
「ちが……っ。ですから、スチュアートは毒を浴びたので、暫くは安静にしないと」
「元気だ」
「いえ、だから……」
「頭痛も体のだるさもない。ミアが嫌でないのならしたい」
悲しそうに眉を下げ、スチュアートは私を抱きしめたまま項垂れた。体が密着して、けれど重たくないのは彼が私に体重をかけないよう気づかっているからだろう。
子どもっぽい言い回しに胸がぎゅうと締め付けられるし、腰を押しつけられて覚えのある熱を感じてそわそわしてもいる。それでも私は治癒魔法士という立場上、一時の誘惑に負けてはいけないのだ。
「スチュアート、あの、今の貴方は欲求が強く出てしまっているようで」
「ああ、ミアに触りたい」
「……それが毒の効力ですから仕方のないことですけど、体調に異変があるかもしれないので」
「ない」
「……スチュアート」
「ミア、したい。したいんだ。どうしてもしたい」
要求している内容があまりにも直截的すぎるが、その溶けた声と縋るような目はずるい。いや、それでもここは……。
「ミア……」

……。
「……少しでも、異変を感じたら教えてくれますか？」
「異変？」
「頭痛とか吐き気とか、呼吸がしづらくなったり心拍が速まったり、などです」
「分かった。そうなったら教える」
「その」
「ああ」
「……だったら、えっと、少しだけならいいですよ」
「ミア！」
「わ」
いいですよ、と言った途端にスチュアートはキスをしてきた。勢いがよくて、少し痛い。え、あっ。
「ん、す、スチュアート、まっ、待ってくださいっ」
「はっ、どうした？」
「お風呂がまだなので、入ってから、っ、あ、ちょっと！」
待ってと言っても手で押してもスチュアートが引いてくれない。こんなことは初めてで戸惑う。服をごそごそと剥ぎ取られて、私はすぐに心もとない格好になってしまった。
「俺はもう済ませた」
「え？」

「職場でシャワーを浴びた」
「……ええと、私がまだなので」
「いい」
「い、いいことはないんですよ。汚いでしょう」
「いい。ミアの匂いが強くて……」
「ひ」
首筋に顔を埋められて、くすぐったさとその行動の異様さに悲鳴が出てしまった。だって、今日は暑かったから汗をかいていて、それなのに。
「興奮する」
うっとりとそう呟いたスチュアートは、どこか知らない人のようだった。
判断を、誤ったのかもしれない。そう気付いた時にはもう遅くて、けれど不思議と恐怖は感じなかった。

私たちの性交には、一定の流れがあった。お互いに服を脱いでキスをして触り合って、そのあとに私の準備をしてもらってそのまま最後までするというのがいつものやり方だ。先に自分で準備をしておくと申し出たこともあったが、さすがに情緒がないと断られた。けれど私がスチュアートのものを

触ろうとすると、それもやんわりとしかし確実に拒否されるのだ。私たちの交わりは、一般的に娯楽とされるような愉しみや悦びを追求するそれでは決してなかった。

だからスチュアートは、本当に子どもが欲しいからそれだけの為に私と交わっているのだと思っていた。性欲も薄く、それなのに私が傷つかないよう最大限の配慮をしてくれていると。この三年、それがどれだけ嬉しかったか知れない。

でも、なら、これは何なんだろう。

「ひ、ぅ、ぅ、んん……っ。す、ちゅ、アート、あっ、も、やめて、やめてったら、ああ……！」

もうずっと、スチュアートが私の股間に吸い付いて離れてくれない。逃げようにも太ももをがっちりと抱え込まれて、身動きが取れなかった。これをされて、どのくらい経っただろう。時計が見えないから分からないけれど、相当な時間をこうされている。

始まりからいつもと違うその行為は、まるで初めての時のように私を困惑させた。いや、むしろ初めての時のほうが落ち着いていたものである。だってこんな、こんなのは知らない。

たくさんキスをされて、されながら胸を弄られて、揉まれて抓られて吸われて舐られた。スチュアートがここまで執拗に胸を構ったことなど、これまで一度もない。驚いて何度も押し返そうとしたのに、やはり彼は引かなかった。

お尻も太ももも背中も、撫でられて舐められた。足の指を舐られた時は焦ったけれど、もう抵抗する体力がなくてはふはふと息を繰り返すので精いっぱいだった。そんなことをされ続ければ、当然だけれど濡れてしまう。スチュアートはそれを見て嬉しそうに笑うと、何を思ったのかそこに口をつけ

た。こんなことも、勿論初めてだった。
やっぱり、私は間違えたのだろう。
「はあ、ぁ、んんう。ふ、う、ぁ、まって、ま、も、イく、またぁ……っ」
「ん、ふふ」
何度目かの絶頂に、全身が震える。駄目だ、もう駄目になってしまう。全部が熱くて気持ちよくて、くらくらしてる。そんな駄目になった私を、スチュアートが笑った。
「たくさんイけて偉いな、ミア。すごく可愛い」
嘘だ、と言いたかったのにそれは音にならなかった。けれどこんな、ぐちゃぐちゃになっているのに可愛いなんて嘘だ。もし仮にそれが本心なのであれば、スチュアートの感性はおかしい。
「は、す、ちゅ……。も、やめ……」
「？　何故だ。気持ちいいんだろう。もっとしてやりたい」
「ひっ、ぃう……！」
スチュアートは楽しそうにまた私の秘豆に吸い付いた。同時に指まで差し込まれて背中が反る。達したばかりの体に緊張が走って、力が抜けない。
前戯が長い、のだと思う。長すぎる。
「は、あああぁ、っん、も、やだ、やあぁ……っ」
嫌だと言って、やめてもらえなかったのは初めてだった。「嫌」でも「駄目」でも「やめて」でも、何かしらの拒絶をすればスチュアートはいつもすぐに手を止めてくれたのに。だからあまり言わない

よう気をつけなければならなくて、それなのに今日はどんなに抵抗してもやめてくれない。
どうしようどうしようと、頭の中がそれでいっぱいになるけれど打開策なんて見つからなかった。シーツを掴んで耐えるのが精々で、順序だてて何かを考えることもまともにできない。ただ、気持ちよくて——。
「〜〜っ！」
「……またイった、のか？」
「は、ぅ……」
「よかった」
も、なにも、かんがえられない。じぶんが、じぶんでなくなってしまいそう。
強すぎる快楽が全身を支配していて、指の一つも満足に動かせない。悲しくもないのに涙が溢れて、けれどスチュアートは何を思ったのかそんな私にキスをした。
「ん、ふ、ぁ……」
「はあ、ミア、好きだ。可愛い、愛している……！」
「ぇ、あっ、あ……っ！」
スチュアートは何かを言いながら私の中に押し入ってきた。いつもより熱くて大きな気がするのは気のせいじゃないと思う。
痛くはないけれど苦しくてぞくぞくして、けれど勝手に逃げる腰はしっかりと押さえられているからどこにもいけない。

「んんんぅ……」
「はあ、ああ、中が締まって、ずっと震えてて気持ちいい」
「はあぁ、ん、あ、あ……」
「ミア、ミア……」
「んー……っ」
奥の奥まで入れられると、また背中が反る。全部、入った。もう入らない。のに、ゆっくり奥を押されると、本当に堪らなくて。
「ミアは、こうされるのが好きだろう？　俺も好きだ。ミアがよさそうで、ぅ、俺もいい……っ」
声すらも、出せない。
スチュアートが何か言っているようだけれど、私はやっぱりそれを聞き取ることはできなくて必死にシーツを掴んだ。
粘った音がする。心臓の音も煩い。ああ、何が起こっているのだろう。
「……ミア、そんなに締めたら、すぐに出てしまう」
また、何か言われて、でも分からない。だから私は、分からないままでスチュアートに抱き着いた。肌が触れ合って、そこが熱くて、心地いい。
「ぐぅ、う、ミア……っ」
「ん、すちゅ、あーと」
「っ、は、ミアっ」

「あっ」
「ミア、ミア！」
「あっ、ああっあー……っ！」
スチュアートは何故か怒ったような顔をして、私の名前を呼び続けた。名前は、分かる。だから、どうしたの？　って聞きたいのに、それはできなかった。
ごちゅごちゅって、奥をたくさん突かれて、目の前がちかちかしてすごく気持ちがいい。こんなの、初めてだ。いつもだってスチュアートはたくさん優しくしてくれて心地よくて幸せだったのに、こんなの知らない。知らなかった。
「あぅ、あっあっ、んん、ああ……！」
「はあ、ミア、ミアっ。俺のだ、俺の、ミア、ああくそっ！　出る……っ！」
「んんんー……っ」
抱き込まれて、ぐ、とお腹の中を串刺しにされるように穿たれて、また身動きが取れなくなる。多分、終わった。スチュアートの体が震えて、止まったから、多分そう。
暫くそのままで、けれど私はやっとゆっくり息を吐いた。
「は、ぅ……。はあぁ……」
……すごかった。世の中には、こんなに刺激的なことがあるのかと現在進行形で驚いている。知らないままでよかったような知れて嬉しかったような、おかしな気分だ。
ああ、違う。今はそんなことはどうでもよくて。

「あの、スチュアート、大丈夫ですか？」
「ん？」
「気分が悪くなったりとかは……」
「ない」
「……ええと、なら、離れてもらっても」
「嫌だ」
「え」
「絶対に嫌だ。まだする」
「え、は？　っ!?」
ぐりん、と視界が変わる。入れられたままの中が過剰に反応して快楽を拾ってこようとするから困るが、それどころではなかった。足は折りたたんだままでうつ伏せになって、お尻を後ろから持たれていて、その事実に頭が真っ白になりそうだ。
後ろから、なんてこの三年間で二回くらいしかやってない。いつもの流れで、大抵抱き合ったまま静かに交わって、終わったら体を簡単に清めて一緒に寝て、それで。だから、こんな、どうして。
「ふ、ん、ん、んっ、は、ス、チュアート、あ、待って、ねえ、待ってったら……っ」
「無理だ、もっとしたい。気持ちよくて、は、腰が止まらない」
「あっ、あ、そん、な、ああん」
だめ、だめだ。やめさせなきゃ。どくのさようがつよまってるのかも、しれない。

「あ、あ、すちゅ、おねが、は、んんぅっ」
「分かっている、ちゃんと気持ちよくするから」
「ひ、ぅうう、あああん……」
ちがう、と言いたくて、もう諦めた。だって、スチュアートが上から覆いかぶさってきて、手を握ってくれるから。私のそれより二回りは大きなそれが熱くて、胸が苦しい。
「はあ、あ、ああん、きもちいい、すき、あっ、すちゅあーとぉ……っ」
「ああ、ミア、俺も気持ちいい。は、っく、ミア、ミア、俺も好きだ……」
「あ、あ、あー……っ」
シーツに額を擦りつけながら、私は何度目かの絶頂を味わった。
そこからは、よく覚えていない。いつもみたいに優しくされたり、激しく揺さぶられたり、延々とキスをしたりしたと思うけれど、夢だったかのように全部が曖昧だった。
気が付いたら眠っていて、起きた時にはお風呂の中だった。スチュアートによりかかっていた私は、彼に体を洗われていたらしい。毒の効果が薄れたのか、スチュアートはひどく申し訳なさそうな顔をして何度も謝るのだ。それが何だかおかしくて笑ってしまったけれど、とても疲れていた私はまたそのまま意識を手放した。